

別府市における老舗旅館の経営動向

浦 達 雄

I. はじめに

1. 研究の背景

別府市には、別府八湯と称される8ヵ所の温泉地が存在する。すなわち、別府・浜脇・観海寺・堀田・明礬・鉄輪・柴石・亀川の各温泉地である。この中で、旅館の集中地区は別府と鉄輪であり、明礬と観海寺がこれに次いでいる。2012年10月現在、別府市旅館ホテル組合連合会に加盟する旅館は107軒である。内訳は別府41軒・観海寺7軒・明礬7軒・鉄輪45軒・亀川7軒で、浜脇・堀田・柴石は0軒となる。亀川では休業中の旅館も含まれ、実際の営業数は3軒程度と思われる。観海寺には周辺地域の旅館も含まれる。浜脇と堀田では数軒のアウトサイダーが営業を行なっている。

大分県東部保健所の統計¹⁾では、2012年3月末現在の営業数は307軒を数えている。内訳はホテル28・旅館272・簡易宿所4・下宿3となる。高度経済成長期における別府市の旅館数は、1967年10月現在、実に939軒を数え、ピークを迎えた(浦達雄 2006)。

ところで、豊後国速見郡村誌によると、1877(明治10)年前後の別府の旅館数は、八湯別では、別府40軒・浜脇30軒・亀川10軒(野田2軒・亀川8軒)・鉄輪34軒・鶴見10軒(明礬10軒)・南立石18軒(観海寺8軒・堀田10軒)で、142軒を数えている(大分県1885)。現在の旅館数(組合加盟)は、明治初期と大差ない状況となっている。

江戸後期の温泉番付では、浜脇は西前頭3枚目に位置し、瘡毒に吉、別府は前頭6枚目に位置し、眼病に吉とある(西川義方1932)。したがって、別府は江戸時代から続く温泉地であることは明白である。しかし、江戸時代開業の旅館となると、その数は限定されよう。別

府で一番古いとされる日名子旅館(当初は府内屋、のちの日名子ホテル)の開業は、安政年間(1854~1859年)と言われるが、高度経済成長期における設備投資の失敗で1985年に倒産し、いまはマンションとなっている(浦達雄 2006)。

現存する別府市の旅館では、江戸末期から明治初期にかけて開業した旅館が最も古く、鉄輪では江戸末期開業の辰巳屋、明治初期の中野屋と上富士屋、明礬では江戸末期の山田屋、1875(明治8)年のゑびすやと岡本屋などがあげられよう。したがって、明治・大正年間が開業し、現存する旅館は10軒に満たないと思われる。そこで、本稿では別府市における老舗旅館を事例にして、その経営動向を把握することは意義深いと判断し、調査研究をすすめることにした。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、別府市における老舗の温泉旅館の経営動向について、その実態を明確にすることである。ここでは、観海寺温泉、鉄輪温泉から1軒を選出し、聞き取り調査を行った。観海寺の事例は、貸間旅館から観光旅館、そして和風旅館へ、鉄輪の事例は、貸間旅館から和風旅館へ方向転換し、時代の変化に対応した経営を実践している。現在、両者共に料理商品をセールスポイントとしている。

調査の方法は経営者に対する聞き取り調査となる。老舗旅館として、その経営動向の実態を明確にし、今後の旅館経営のあり方や方向性を探るものである。

3. 従来の研究成果

筆者はこれまで主に温泉地における小規模旅館の経営動向について、その実態を明確にしてきた²⁾。その調査の手法は経営者に対する聞き取り調査に主眼を置くもの

であった。つまり細かなデータ分析ではなく、趨勢の把握に努めた。

II. A 旅館（観海寺温泉）

新築のたびに業態を変革。料理旅館に高品位な客室を付帯した温泉旅館

1. 概要

観海寺温泉は別府八湯では高台に位置し、別府湾や市街地など眺望の開ける温泉地として知られる。第2次世界大戦まで文人墨客が数多く訪れる温泉地として知られた。現在の観海寺の大半は大正末期から開発された大規模な別荘分譲地となる。現在、温泉集落は朝見川の左岸と右岸に展開し、右岸は薬師堂を中心とした旧温泉集落、左岸の大部分が杉乃井ホテルとなっている。

A 旅館の概要は表1に示す通りである。当初は貸間旅館（湯治旅館）、高度経済成長期は観光旅館、石油ショック後の安定経済成長期では料理旅館として機能し、現在、観海寺を代表する老舗の料理旅館として知られる。

2. 貸間旅館、そして観光旅館、さらに料理旅館へ

開業は1923（大正12）年と言われ、観海寺で現存する旅館では最も古い温泉旅館である。現在の主人（専務）は4代目となる。A 旅館の前身は緑屋と称した。初代経営者は大分市（坂ノ市）の出身で、花菱旅館（現在の花菱ホテル）で修業し、緑屋を開業したとのことである。1931（昭和6）年10月28日の夜、観海寺は大火に見まわれ、旅館の大半が消失した。A 旅館の現在地には松屋が営業していたが、大火を契機にA 旅館が土地を買収し、緑屋から屋号を変更したのである³⁾。屋号の意味は地番の地名から来ている。

A 旅館は建て替えと共に業態を変えてきた。開業当初は貸間旅館、第2次世界大戦後は1958年に新築し、建物は木造2階建て、客室は34室（収容人員は約350人）で、修学旅行生も泊める団体志向の観光旅館となった。

1976年には再度建て替えて、客室を11室（収容人員48人）に減じ、夕食を意識した料理旅館に変更した。その後、宿泊を希望する顧客が増加し、1997年5月、現代和風の様式を各所に取り入れた料理旅館となった。改築に際して、客室は従来の11室のままにしたが、収容人員は35人程度とした。その際、屋号をさらに変更し、イメージアップを心掛けた。

2009年12月29日、高台の駐車場を活用して新館を建築した。新館では顧客の要望を出来るだけ取り込み、経営者としての自己主張を行った。本館とは玄関を別にしたところが、意気込みの現れと言えよう。本館は月ノ想、新館は丘ノ想と新しく命名した。丘ノ想は月ノ想はもちろん他の温泉旅館との差別化を図った施設で、別府市には少ない高品位旅館を目指したのである。

月ノ想は木造2階建て、丘ノ想は鉄筋5階建てとなる。月ノ想は客室11室（収容人員48人）で、付帯施設はフロント・ロビー・売店コーナー・大広間（30畳間）・食事処（47席・11テーブル、畳では40畳間）・家族風呂（4ヵ所）がある。食事処は日田家具のテーブルと椅子でおもてなしを行う。柱と家具の色はダークブラウン、壁の色はライトブルーで統一し、落ち着きある空間を演出している。

丘ノ想は客室8室（洋間7室、和室1室）（収容人員25人）となる。内訳はメゾネットタイプ（100m²）2室、普通客室（60m²）6室で、いずれも露天風呂付帯となる。付帯施設はフロント・ロビー・食事処8室（洋室6室・和室2室）・男女別大浴場（露天風呂付帯）・鉄板焼きルーム・エステサロン・日本庭園などがある。

丘ノ想は客室の照明にも神経を注いだが、洗面台では、洗顔や化粧の関係で明るめにしたが、他の照明は光を落とした落ち着きのあるものを用いている。アメニティは基準を高めて神経を注いでいる。

丘ノ想の建築は、月ノ想と同様に現代和風とし、和風の空間の中で、新しい生き方、つまり洋風を巧に取り入れている。具体的には、洋式の客室とベッドである。ベッドは部屋のメーカーがしやすく労働軽減にもつながっている。

3. 経営数値

A 旅館の年商は4億円を目標とする。年商の内訳は宿泊部門90%・日帰り部門10%で、この10年間で宿泊部門が増加傾向にある。リピーター率も20%から40%へ増加し、料理の評判が定着している。黒川温泉をはじめ、同業の旅館スタッフが社員旅行で宿泊するようなケースも増えており、一般客以外に旅館関係者の宿泊の多いこともA 旅館の特色と言えよう。

申し込み形態は、直（電話）30%・直（オンライン）20%・エージェント20%・ネットエージェント30%となり、ネットエージェントの送客が増加している。市場は大分県内20%・大分県外80%で、県外では福岡方

表 1 A 旅館の経営動向

地区	観海寺温泉
初代経営者	大分市(坂ノ市)の出身。花菱旅館(現在の花菱ホテル)で修業。
開業	1923(大正12)年
主な歩み	当初、緑屋として創業。 1931年:観海寺大火。その後、現在地へ進出(松屋の土地を買収)。 1958年:新築。建物は木造2階建て、客室は34室(収容人員は約350人)。 1973年:杉乃井ホテルで売店経営(2001年まで)。 1976年:建て替え。客室11室(収容人員48人)。 1997年:5月。現代和風の様式を各所に取り入れた料理旅館に改築。客室11室で、収容人員は35人程度。投資額は約2億円。年商の目標額は1億円。従来の年商は2,000万円から3,000万円程度。 2009年:12月29日。高台の駐車場を活用して、新館「丘ノ想」を建築。
建物敷地 延床面積	月ノ想:木造2階建、丘ノ想:鉄筋5階建 3,300m ² 月ノ想:888.18m ² 、丘ノ想:1,247.35m ²
客室 収容人員	月ノ想:11室、丘ノ想:8室(洋間7室・和室1室) 月ノ想:48人、丘ノ想:25人
付帯施設	月ノ想:フロント・ロビー・売店コーナー・大広間(30畳間)・食事処(47席・11テーブル、畳では40畳間)・家族風呂(4カ所)など。 丘ノ想:フロント・ロビー・食事処8室(洋室6室・和室2室)・男女別大浴場(露天風呂付帯)・鉄板焼きルーム・エステサロン・日本庭園など。
年商 宿泊と日帰りの内訳 オンシーズン オフシーズン	4億円(目標額) 宿泊部門90%・日帰り部門10% 1・5・12・8月 2・6月
宿泊料金	月ノ想:1万5,800円(週末は1万8,900円)。 丘ノ想:メゾネット2万8,000円(週末3万100円)、普通客室2万5,000円(週末2万7,100円)。
申し込み形態 宿泊目的 市場 客層	直(電話)30%・直(オンライン)20%・エージェント20%・ネットエージェント30%。 観光80%・料理20%。温泉と料理を楽しむノンビリ派が増加。 大分県内20%・大分県外80%。県外では福岡方面が約50%。 同伴50%・家族30%・グループ20%。
スタッフ	家族3人・正社員9人・パート4人。 内訳は、調理師3人・フロント2人・客室4人。
料理商品 企画商品	創作会席膳。京風の味付けで、薄味。 月ノ想:昼食プランとして、お手軽懐石4,620円(税込)、おすすめ懐石コース5,775円、創作懐石コース9,240円など。 月ノ想:夕食プランとして、創作懐石5,250円、おまかせ創作懐石6,300円~など。
経営方針	顧客の立場で考える。
老舗旅館として思い	継続することの難しさを考えるより再来して頂ける嬉しさの方が大きく、旅館業は楽しくて、やりがいのある仕事として捉えている。
セールスポイント・その他	ロビーがギャラリー。各種イベント充実。ギターコンサート、茶道の会合など。朝礼は毎朝10時頃開催。「職場の教養」という冊子を朝礼で活用。月ノ想の食事処では、テーブルや椅子は日田家具を使用。食器は土もの(有田焼・唐津焼など)が主体だが、別府の藍胎漆器や竹器も用いる。

(注1) 経営者に対する聞き取り調査による。時期は2012年。

(注2) 経営数値は推定値。

面が50%を占めている。

オンシーズンは1・5・12・8月など、オフシーズンは2と6月となる。構成は同伴50%・家族30%・グループ20%で、年齢層に特色はない。宿泊目的は観光80%・料理20%だが、温泉と料理を楽しむノンビリ派が

増えている。

1人当たりの宿泊料金(2人で1部屋利用。1泊2食の料金)は、月ノ想は1万5,800円(週末1万8,900円)、丘ノ想はメゾネットが2万8,000円(週末3万100円)、普通客室は2万5,000円(週末2万7,100円)が

基本料金となる。しかし、特日は特別料金となる。

4. 料理は創作懐石膳

A 旅館のスタッフは家族3人・正社員9人・パート4人となる。内訳は調理師3人・フロント2人・客室4人で、厨房は月ノ想と丘ノ想の2カ所を付帯している。料理は創作会席膳で、京風の味付け、薄味となる。料理は手作りに拘り、大分県の郷土食材が食卓を賑わすことになる。

食器は、有田焼や唐津焼など土もの、そして別府産の籃胎漆器や竹器などを用いている。華やかさ、食べやすさ、洗いやすさなどを念頭に購入している。形は四角や円い皿を主体にシンプルにまとめ、凝りすぎないようにしている。

料理の基本は、調理師の技と食材の融合であり、献立は四季折々、月ごとに変更する。釜や元湯の天然温泉である薬師湯を調理に使用し、まろやかさを演出している。丘ノ想では、個室レストラン「小町」を整備し、プライベートな空間を提供している。

月ノ想の日帰りプランとして日帰りの昼食と夕食がある。昼食プラン（2名以上）は11時から14時30分の時間帯で設定し、お手軽懐石（一番人気プラン）4,620円（税込）・おすすめ懐石コース5,775円・創作懐石コース9,240円などがある。特典として薬師の湯で入れたコーヒー・温泉入浴付きのサービスがある。なお、3人以上のプランとして、創作ミニ懐石3,150円がある。夕食プランは17時から21時30分に設定し、創作懐石5,250円・おまかせ創作懐石6,300円～などがある。その他のプランとして会席料理がある。慶事、法事などが対象で、要望に応じてケーキ・花束などを用意している。

5. セールスポイントと経営方針

A 旅館の月ノ想はロビーがギャラリーとなっている。古美術や絵画は展示だけでなく、販売も行っており、画廊として機能している。各種イベントも充実している。ギターコンサート、茶道の会合なども行われ、文化の発信基地として知られる。

スタッフの朝礼は毎日行なっている。10時頃からフロント・板場・客室係りが集合し、本日の顧客の動向、料理の好き嫌いなどを確認し、時間があれば体操を行うことも日課としている。さらに、「職場の教養」という冊子をミーティングに使用し、接客の方針などの統一を図っている。

経営方針は「顧客の立場で考える」で、料理・温泉・眺望・老舗・高品位などがキーワードと言えよう。老舗旅館として思いは、継続することの難しさを考えるより、再来して頂ける嬉しさの方が大きく、旅館業は楽しくて、やりがいのある仕事としてとらえている。

Ⅲ. 鉄輪温泉：B 旅館

顧客の高齢化で、湯治場の不振が続く中、孤軍奮闘する和風旅館

1. 概要

鉄輪温泉は別府八湯では昔から湯治場として知られ、現在でも湯治場としての雰囲気の色濃く残している。1277（建治3）年、一遍上人が開いたとされるむし湯を中心に、江戸時代後期から温泉集落が開け、現在に至っている⁴⁾。1964年にやまなみハイウエーが開通して、大型の旅館がハイウエー沿いに進出したが、現在でも、むし湯界隈は貸間旅館を中心に和風旅館が集積している。鉄輪は九州を代表する湯治場として知られるが、顧客の高齢化などもあって客足は毎年のように減少し、貸間旅館の廃業、そして貸間旅館から和風旅館へ転換するケースが散見される。

B 旅館の概要は表2に示す通りである。当初は温泉山永福寺⁵⁾の宿坊として成立し、その後は貸間旅館、現在では和風旅館として知られる。B 旅館は鉄輪では5本指に数えられる老舗で、料理商品と温泉施設に特色が見いだせよう。

2. 宿坊、そして貸間旅館、さらに和風旅館へ

B 旅館は、1891（明治24）年、廃寺となっていた湯滝山松寿寺を温泉山永福寺として本堂を再興し、その宿坊として開業した。主人は3代目となる。現在の建物は1955年頃に新築し、その際、温泉掘削も行い、引湯旅館の多い鉄輪温泉の中では数少ない源泉旅館となった。しかし、源泉の維持管理は配管などの問題もあって悩みは多い。温泉井戸の深度だが、最初は80m、その次は130m、現在の井戸は180mに達している。

現在の客室は10室で、収容人員は25人を数える。ただし、1室は湯治専用の客室で、常連客のみの利用となる。客室10室の内訳は、本館は7室（4室がWC付）、新館3室（WC付）となる。付帯施設は温泉施設のみで、内湯2カ所・露天風呂2カ所で、いずれも家族風呂での利用が可能となる。

2000年、湯治客以外の観光客を宿泊させるに当って、

表 2 B 旅館の経営動向

地区	鉄輪温泉
初代経営者	温泉山永福寺の初代住職は福岡県出身。
開業	1884 (明治 17) 年：地元の関係者と再興の話をつける。 1891 (明治 24) 年：永福寺本堂完成 (正式な開業年)。
主な歩み	当初は温泉山永福寺の宿坊。 1955 年頃：現在の建物建築。温泉掘削。高度経済成長期は湯治旅館。 1984 年：鉄輪愛耐会設立。 1994 年：愛耐会、ゆけむり散歩の句碑設置開始。 2000 年：新館の増築と本館客室の改装。露天風呂付帯。 2008 年：本館の客室改装。
建物敷地 延床面積	木道 2 階建 約 1,000㎡ 約 500㎡
客室 収容人員	10 室 25 人
付帯施設	ロビー・内湯 2 ヲ所・露天風呂 2 ヲ所など。 温泉山永福寺の境内の奥に位置する。
年商 宿泊と日帰りの内訳 オンシーズン オフシーズン	3,000 万円 (目標額) 宿泊部門 90%・日帰り部門 10% 11・8 月 6・7 月
宿泊料金	8,500 円～1 万 3,000 円 週末は 1 万円から、正月など特日は 1 万 2,000 円から 1 万 5,000 円まで。湯治プランとして、1 泊 2 食が 6,000 円 (直の申し込み)、ネットでは連泊プランが 7,500 円 (1 泊当たり) を設定。
申し込み形態 宿泊目的 市場 客層	直 (電話) 75%・ネットエージェント 25%。 湯治は 20% 程度。観光・温泉・休養・料理派が大半。 大分県内 10%・大分県外 90%。県外では福岡方面が多い。 同伴 30%・家族 30%・グループ 35%・1 人 5%。
スタッフ	主人・女将・子息・女将の妹。繁忙期はパート 3 人。
料理商品 企画商品	愛情料理。地元の食材を活用した手料理・手作り料理。ご飯はかまど炊き。 別注料理として地獄蒸し 1,200 円 (1 人前)、関アジ姿造り 3,000 円 (1 人前)、フグ薄造り 3,000 円 (2 人前) など。湯治プラン・連泊プランなど。
経営方針	営業一途
老舗旅館として思い	経営は年々厳しくなっているが、地域社会の中での宿のあり方を追求し、その結果が家業の継続につながっていると考えている。
セールスポイント・その他	刺身は魚屋の刺身ではなく、主人自らがさばき、いわばオーナーシェフで、河豚調理師の資格を持つ。 館内に女将作成の刺繍画などを展示。 主人は愛耐会の活動を通してまちづくりを行い、渋の湯の管理・運営などを行なっている。

(注 1) 経営者に対する聞き取り調査による。時期は 2012 年。

(注 2) 経営数値は推定値。

新館の増築と客室の改装を行うことになった。新館では客室 3 室、露天風呂 2 ヲ所を付帯した。その後、2008 年からは本館の客室の改装を行った。従来の客室は長期滞在の湯治客を主体としたシンプルな造りであった。そこで隣室との壁の補強、一部客室の WC 付帯などを行った。

HP の開設も早く、2000 年には立ち上げた。ネットエージェントの導入も比較的早かったが、従来の湯治客

という常連客ではなく、まったく新規の観光客が宿泊することになり、客室の改装となったのである。寝具については、掛け布団にはエリカバーをつけて、常日頃から清潔さを保つことに神経を注いでいる。

3. 経営数値

年商の目標額は 3,000 万円に設定するが、突破は難しい。年商の内訳は宿泊 90%・日帰り 10% となる。日帰

りには会食や日帰り温泉入浴などがある。

年商からみたオンシーズンは11月と8月、オフシーズンは6月と7月となる。従来は、湯治客が多い1月と2月がオンの月で、暑い夏はオフであったが、季節性は様変わりしている。

宿泊客の市場は、大分県内10%・大分県外90%で、県外では福岡県が目立つ。以前は広島県が多かったが、広島から別府へのフェリーが休航になってから、激減している。

申し込み形態は、直（電話）75%・ネットエージェント25%で、ネットエージェントの割合が徐々に高まっている。ネット利用の場合は予約が週末に集中する傾向にある。

客層をみると、湯治は20%程度に留まり、観光・温泉・休養・料理派が大半を占めるようになった。構成は同伴30%・家族30%・グループ35%・1人5%などとなる。週末はネットの関係で若い世代が増えている。

1人当たりの宿泊料金（2人で1部屋利用。1泊2食）は8,500円から1万3,000円に設定し、週末は1万円から、正月など特日は1万2,000円から1万5,000円までとなる。

湯治プランとして、1泊2食が6,000円（直の申し込み）、ネットでは連泊プランが7,500円（1泊当たり）を設定し、従来からの湯治客に対応している。ちなみに、平均宿泊単価は9,000円、同消費単価は1万円となる。

4. 愛情料理の提供

B旅館は家族が主体で、主人と女将・子息・女将の妹の4人体制で、忙しい時はパート3人が加勢する。料理は愛情料理となる。地元の食材を活用した手料理・手作り料理が食卓に並び、ご飯はかまど炊きとなる。刺身は魚屋の刺身ではなく、主人自らがさばき、いわばオーナーシェフで、河豚調理師の資格を持つ。

料理は見た目よりも素材で提供している。刺身は提供する直前でさばくことにしている。魚介類はシンプルなものが美味しいと拘りを持つ。鉄輪といえば、地獄蒸し料理だが、B旅館では新鮮魚介類に特色がある。例えば、コチという魚だが、夏のフグと言われ、原則、通年提供を行なっている。刺身はうすびきにするが、骨が固く奇形で、魚屋では扱い難い魚だが、主人が自分でさばくために問題はない。別注料理として地獄蒸し1,200円（1人前）、関アジ姿造り3,000円（1人前）、フグ薄造り3,000円（2人前）などがある。

5. セールスポイントと経営方針

主人はまちづくりにも情熱を注いでいる。愛耐会（1984年設立）では、現在、会長職を務め、ライフワークとして、鉄輪俳句筒湯けむり散歩を行なっている。なお、句集は80集まで発行し、優秀句碑は19カ所に及ぶ。句集の他に俳画のカレンダー、鉄輪焼酎を企画・販売している。

鉄輪の代表的な温泉施設である洪の湯の運営・管理も主人の大切な仕事である。洪の湯は明治初期に開設された共同湯で、今後も守り、育てることに尽力を注いでいる。

女将は、独身時代、福岡市の画廊勤務の経験があり、日本画が得意である。館内には、女将が作成した刺繍画などが展示されている。テーマは「ピエロ」「早春賦」などで、温泉や料理での癒しと共に、美術での癒しが楽しめる。

経営方針は「営業一途」となる。女将の場合、睡眠以外の時間帯は営業のことを常に考えており、特に、対人関係に神経を注ぎ、人柄やタイミングを計って名刺を配り、集客に務めている。主人は料理とまちづくりに心血を注いでいる。まちが繁盛すれば、旅館も繁盛し、旅館商品は料理が主体という考えである。

セールスポイントは、料理商品と温泉施設となる。さらに、温泉山永福寺の境内に位置することも見逃せない。永福寺は一遍上人ゆかりの寺院であり、温泉マニアの間では、鉄輪のパワースポットとして密かな人気を博している。鉄輪の小規模旅館では、オーナーシェフは少ない。B旅館はオーナーシェフによる料理を提供しており、最大の特色と言えよう。温泉は自家源泉が売り物で、源泉かけ流しとなる。熱いのが玉に瑕で、この熱さを求めて入湯する温泉マニアが意外と多い。

老舗旅館として思いは、経営は年々厳しくなっているが、地域社会の中での宿のあり方を追求し、その結果が家業の継続につながっていると考えている。その活動の一端が愛耐会の活動であり、洪の湯の管理などとなっている。

IV. む す び

以上、別府市における老舗の温泉旅館を事例として、対称的な2軒を取り上げ、旅館経営の実態について観光地理学の立場で、その概要を明らかにした。その結果、次の点が指摘できよう。

①時代の変化と共に、宿泊業としての業態を変えながら

生き延びている。

- ②料理商品に特色があり、調理師または主人が技と食材を駆使して料理そのものを旅館のセールスポイントにしている。
- ③特別料理や別注料理があって、料理商品のメニューが充実している。
- ④温泉施設は貸切対応が可能であり、源泉かけ流しとなっている。
- ⑤客室や寝具などは、特に清潔さを意識している。
- ⑥館内には美術品などがあって、文化の香りがする旅館づくりを行なっている。
- ⑦今後の課題は、地域の活性化と共に、旅館単体の一層のレベルアップである。別府市では、景気の後退や後継者不足などで、旅館数が減少しており、その経営環境は実に厳しい。いま個店の頑張りが一番に求められよう。
- ⑧今後の温泉旅館の方向性は実に厳しい。北陸の温泉地は異業種からの旅館再生企業の侵入を許し、温泉地域社会は混乱を極めている。特に老舗の大型旅館の経営が厳しい。ここで取り上げた温泉旅館は小規模旅館であり、経営者の顔の見えることが特色である。大分県産の食材を活用した「感動料理」や「愛情料理」で活路を広げたい。

謝辞

本稿の作成に当たり、2軒の旅館経営者(女将や専務を含む)に対して、聞き取り調査を実施した。お忙しい中、親切に対応をして頂き、ここに記して謝意を表します。

注

- 1) 平成24年度東部保健所報(HP)
http://www.pref.oita.jp/uploaded/life/260469_284867_misc.pdf
- 2) 浦達雄による主な論文は次の通り。(最近のもの)
浦達雄(2006a)「温泉観光地における個宿の経営動向」大阪明浄大学紀要6、9~18頁。
浦達雄(2006b)「別府市鉄輪温泉における和風旅館の経営動向」総合観光研究5、87~94頁。

浦達雄(2008)「別府温泉における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要8、1~8頁。

浦達雄(2009a)「城崎温泉における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要9、1~9頁。

浦達雄(2009b)「最近の和倉温泉における小規模旅館の動向」温泉地域研究13、33~40頁。

浦達雄(2010a)「珠洲市における民宿の経営動向」大阪観光大学紀要10、1~14頁、

浦達雄(2010b)「最近の黒川温泉における小規模旅館の動向」温泉地域研究15、1~10頁。

浦達雄(2010c)「旅館再生企業・翼リゾートの事業展開」観光研究論集(大阪観光大学観光学研究所年報)9、11~18頁。

浦達雄(2011)「珠洲市における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要11、9~16頁。

浦達雄(2012)「東日本大震災における小規模旅館の経営動向-浅虫温泉・いわき湯本温泉を事例として-」温泉地域研究19、11~22頁。

- 3) 稗田武士(1925)によると、観海寺で営業する著名旅館として、松屋・緑屋などの屋号が記載されている。
- 4) 安東作良(1908)・稗田武士(1925)などによると、むし湯の開湯は1277(建治3)年と記載されている。1276(建治2)年の開湯説もあり、今後の研究が期待されよう。
- 5) 温泉山永福寺のルーツは大友家3代頼泰(1222-1300年)が建立した湯滝山松寿寺と言われる。その後、紆余曲折があって、明治になって無住廃寺となった。1884(明治17)年、福岡県出身の河野智円が地元の関係者と再興の話し合いがついて、1891(明治24)年、尾道の永福寺の寺号を借り受けて温泉山永福寺として本堂が完成した。

参考文献(発行順)

- 大分県(1885)『豊後国速見郡村誌』大分県、2冊。
安東作良(1908)『豊後鉄輪みやげ』安東作良、12頁。
稗田武士(1925)『最新別府温泉案内』大別府聯盟協会、192頁。
西川義方(1932)『温泉と健康』南山堂書店、449頁。
浦達雄(2006)『別府温泉郷の観光地域形成に関する研究』クリエイツ、218頁。